
三須田直樹は小説が書けない

三須田直樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三須田直樹は小説が書けない

【Nコード】

N4842S

【作者名】

三須田直樹

【あらすじ】

三須田直樹の三須田直樹による三須田直樹のための文章

三須田直樹は小説が書けない。

リビドーがないわけではない。むしろ、胸やけを起こしそうなほどある。

しかし、吐くことができない。いや、吐くことはできる。正確に言う、きれいな吐瀉物を吐くことができないのだ。

小説を書くというのは、ひとつの例えによって表すとすれば、四方八方へ飛び散っていくあれやこれやをうまく具合に一か所に集めて、固めて、凝縮して、それでもって形を整える作業である。

だが、三須田直樹はそれが上手くできないでいる。四方八方へ飛び散っていくものをうまく捕まえられる。上手く捕まえられたとしてもそれらを固めることができない。

固めることができたとしてもその形をうまく整形できないでいる。三須田直樹は小説が書きたくないわけではない。むしろ、書きたいからこそ胸やけを起こしている。

三須田直樹はあまり本を読まない。

小説が書けないのなら、たくさん本を読んで勉強すればいいのにと
思う。

しかし、三須田直樹はすでに胸やけを起こしている。胸やけを起こしている人がさらに食事をしたくなるかというそれは違う。

むしろ、胸やけを起こしている人は食事などとりたくないはずだ。

だから、三須田直樹はあまり本を読まない。

だが、三須田直樹は本が嫌いというわけではない。目の前に未読の本を差し出されれば、たぶん手を伸ばさずである。

だから、三須田直樹はある親切な泥棒が書店から毎日、本を盗んできて、自分の枕もとに置いてくれないと密かに思っている。が、そ

んなもの好きは存在しえない。

人を動かすには金が必要だ。それはこの世の常識だ。だが、泥棒に金を払うくらいであったら、自ら書店に行き本を買った方がいい。

三須田直樹は大人ではない。

ある規準によつては大人なのかもしれないが、三須田直樹は基本的に大人ではない。

三須田直樹は大人が嫌いだ。ツイッターなんかをやっていると、三須田直樹の嫌いな大人をたくさん見つけることができる。

そいつらは実につまらないことをやけに真面目ぶった口調でつぶやく。

本当はツイートというのは鳥のさえずりという意味もあるはずなのだが、そんな風情はツイッターにはない。皆無だ。あるのは有名人の宣伝と世の中のぎすぎすした感じだけである。

三須田直樹は純粹だ。

故に世俗的なことを嫌っている。だが、そんなことを言つと、三須田直樹の頭の中にこんな声が響く。「おまえはすでに十分世俗的だ」嫌だ、嫌だ、嫌だ。

三須田直樹は人間やその人間の発言や行動、そして、人間以外の事象や物事についても多面的であると思つている。

血液型占いについて考えを巡らせたときにそう確信した。

それを知っているはずなのに、三須田直樹は矛盾とうまく付き合えない。

ひとつのことについて、無駄に深く考えてしまう。しかし、基本的に三須田直樹は論理的な思考の持ち主ではないから、一つ一つ論理

的に考えを進めることができない。

故に三須田直樹の思考はぐるぐると同じところを回るのが常であって、実際の思考の到達度は言うほど深くはない。

三須田直樹は二分論が好きだ。

むろん、分かりやすいからだ。しかしながら、安易に二分論を使うことは馬鹿の証であるから、三須田直樹は馬鹿である可能性が高い。

三須田直樹は性的な妄想が好きだ。

最近では結婚する男女は親戚や友達やその他のチケットを買った観衆の前で全裸になってレスリングのような格闘技をしなければならぬという法律のある国の妄想をしている。

そこでお互いにレイプし合うのだ。

だが、このとき、男は必ずしも有利ではないのだ。

女は花嫁修業で格闘技をみっちり修業しているから、ほとんどの場合女が勝つということになっている。

だがこの試合はどちらかが参ったと言わなければ終わらないから、男の方は男のプライドにかけてなかなか参ったと言わないのだ。

そんな男をあざ笑うかのように女はねちねちと責める。花嫁修業の成果を思う存分発揮する。

女の方も結婚する相手なのだから、少しは手加減してあげたり、わざと負けてあげればいいではないかと思う。

しかしながら、この試合の結果で、家計をどちらが預かるかなど家のルールの決定権をどちらが持つかというのが決まるから、家を買うなら、キッチンが大きくしたいと思っている女なんかは負けられないのである。

三須田直樹は男であるか、女であるかわからない。

男のような名前をしているが、桜庭一樹の例もあるから、一概には決めつけられない。

だが、三須田直樹はフェミニズムには厳しい。

三須田直樹は安易にフェミニズムを振りかざす人間が好きではない。フェミニズムはその成り立ちから反男性社会の遺伝子を持って生まれてきた概念であることは明らかである。

だが、その一方で、大義名分には男女平等を掲げてしまっている。これは重大な矛盾である。

そして、もうひとつフェミニストの多くが理解していないことがある。

それは女性優遇は男性差別になり、男性優遇は女性差別になるということだ。

これは非常にバランスを取るのが難しい。

おまけにこれまでの歴史の中で培われてきた伝統的な考え方もそこには絡んできている。

これだけ複雑なものを単純に主張すること自体、三須田直樹は軽蔑の対象になりえると思っている。

三須田直樹はリア充ではない。

三須田直樹は現実的な人間ではないから、現実を充実させることはもちろん不可能である。

三須田直樹は実に空想的な人間だ。まるで地に足がついていない。それどころか、空を歩いている途中に風に吹き飛ばされるような人間である。

むしろそれは高度な現実逃避による賜物だが、気を抜けば三須田直樹といえども、現という名の怪物に飲み込まれてしまうこともある。そうなったら、大変である。現という怪物の胃の中には世間とか法律とか体とかお金とかがあって、三須田直樹は殺人もレイプも愛す

ることも恥ずかしいセリフを吐くことも奇妙な行動をすることもできなくなってしまうのだ。

三須田直樹は人に従うことが嫌いである。

三須田直樹がもしも二男とか二女とかに生まれていれば、もう少し世渡りのうまい人間になっていたかもしれないが、三須田直樹は残念ながら三須田家の一番初めの子供として生まれた。

一番初めの子供というのは大体、独りよがりな考え方を持った人間になりやすい。それは一種の呪いのようなものだ。つまり、一番初めに生まれた子供というのは生まれながらにして呪われた人生を生きななければならないのだ。苛酷である。

三須田直樹は春が怖い。

春はこの世があのに一番近づく季節であると三須田直樹は思っている。

故に春には花が咲き乱れ、人間はときより、眠くなって意識を鈍らせ、桜の下で狂い、理性を失くす。

三須田直樹はそうした春の真実に気づいているから、春という季節を恐れる。

だが、実はその理由は、三須田直樹の誤魔化しでしかない。

三須田直樹が春を恐れる本当の理由は春が新しさを連れてくるからである。

三須田直樹は淀んでいる。

三須田直樹は澄んだ小川では断じてない。

三須田直樹は汚水の流れるドブ川である。

三須田直樹はときどき自殺を考える。

ゆっくりとした死に耐えきれなくなると、三須田直樹は自殺したくなる。

三須田直樹は自殺するなら東京タワーのてっぺんで意味不明な言葉を書いた大量の紙をばら撒いた後、首を吊ろうと決めている。

だが、最近ではスカイツリーなどというものが出来てしまって、その死に方では少タイムパクトが足りないかもしれないと危惧している。

では、スカイツリーのてっぺんで首を吊ったらどうか考える。

しかし、それも、東京タワーならてっぺんまで何とか登れそうだが、スカイツリーではどのように登ったらいいかわからない。

それにそもそもまだ完成していないから、首の吊りようがない。自殺するには時期が悪い。

三須田直樹はこの文章の終わらせ方を知らない。

特にプロットもないし、思いつくままに書いてきたので、結末など考えていなかったのだ。

三須田直樹は本当に計画性という言葉を知らない。

おそらく、三須田直樹の人生がうまくいってないのも計画性の欠如が原因であろうと思われる。

だが、三須田直樹は満塁逆転ホームランを打てば、いつだって挽回できるのだからという考え方の染みついた人間であるから、もはやどうしようもない。

三須田直樹はどうしようもないクズなのだ。

三須田直樹はこの文章を終わらせるにはどうしたらいいかと考える。このような恥ずかしい文章をなぜ書いているのか、実はその疑問を三須田直樹は書き始めてすぐのときにすでに持っていた。

だが、そんな疑問を持ちつつ、書き始めたものは終わらせねばなる

まいと妙な意地がそこに発生してしまい、ここまで書き続けてしまっていた。

三須田直樹は旅に出る。

三須田直樹はこの文章を終わらせるためには旅に出るしかないということを悟った。

そのために、三須田直樹は別れの挨拶をしなければならなかった。だが、三須田直樹という人間は挨拶というものが苦手である。

そのせいで、周囲の人間からの評価を落としているにもかかわらずである。

だから三須田直樹はかろうじてみなさん方に振り返ると、情けないような、許しを乞うような、気持ちの悪い笑みを浮かべ、右手を挙げた。

どうやら、三須田直樹にとってそれが別れの挨拶であるらしかった。三須田直樹はそれが終わると、左足のかかとを右足の内側のくるぶしへ軽く3回ぶつけた。

すると、次の瞬間、三須田直樹は5メートルほど急激に上昇したかと思うと、その後で霞のごとく消えてしまった。

後に残ったのは、みなさんのすごした無駄な時間だけだったが、みなさんは人生に無駄なプレイなどあるものかというポジティブな考え方の人ばかりであったから、それほど、三須田直樹のことを怒ったり、批判したり、軽蔑したりはしなかった。

これでこの文章は終わりです。

終りといったら終りなのです。

これ以上、苦痛を長引かせて何になるといつのか。

誰が何と言おうと、この文章はこれで終りなのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4842s/>

三須田直樹は小説が書けない

2011年10月6日22時54分発行